

- ① 秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ  
 □ ② 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の  
 □ ③ あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の  
 □ ④ 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の  
 □ ⑤ 奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の  
 □ ⑥ かささぎの 渡せる橋に おく霜の  
 □ ⑦ 天の原 ふりさけ見れば 春日なる  
 □ ⑧ わが庵は 都のたつみ しかぞ住む  
 □ ⑨ 花の色は うつりにけりな いたづらに  
 □ ⑩ これやこの 行くも帰るも 別れては  
 □ ⑪ わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと  
 □ ⑫ 天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ  
 □ ⑬ 筑波嶺の 峰より落つる 男女の川  
 □ ⑭ 陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに  
 □ ⑮ 君がため 春の野に出でて 若菜つむ  
 □ ⑯ 立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる  
 □ ⑰ ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川  
 □ ⑱ 住の江の 岸による波 よるさへや  
 □ ⑲ 難波潟 短きあしの ふしの間も  
 □ ⑳ わびぬれば 今はた同じ 難波なる  
 □ ㉑ 今来むと 言ひしばかりに 長月の  
 □ ㉒ 吹くからに 秋の草木の しをるれば  
 □ ㉓ 月見れば ちぢにものこそ 悲しけれ  
 □ ㉔ このたびは 幣も取りあへず 手向山  
 □ ㉕ 名にし負はば 逢坂山の さねかつら
- わが衣手は 露にぬれつつ  
 □ 衣ほすてふ 天の香具山  
 □ 長ながし夜を ひとりかも寝む  
 □ 富士の高嶺に 雪は降りつつ  
 □ 声きく時ぞ 秋は悲しき  
 □ 白きを見れば 夜ぞふけにける  
 □ 三笠の山に 出でし月かも  
 □ 世をうぢ山と 人はいふなり  
 □ わが身世にふる ながめせしまに  
 □ 知るも知らぬも 逢坂の関  
 □ 人には告げよ 海人の釣舟  
 □ をとめの姿 しばしとどめむ  
 □ 恋ぞつもりて 淵となりぬる  
 □ 乱れそめにし われならなくに  
 □ わが衣手に 雪は降りつつ  
 □ まつとし聞かば 今帰り来む  
 □ からくれなゐに 水くくるとは  
 □ 夢の通ひ路 人目よくらむ  
 □ 逢はでこの世を 過ぐしてよとや  
 □ みをつくしても 逢はむと思ふ  
 □ 有明の月を 待ち出でつるかな  
 □ むべ山風を 嵐と言ふらむ  
 □ わが身ひとつの 秋にはあらねど  
 □ 紅葉の錦 神のまにまに  
 □ 人に知られて くるよしもがな

26 小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば

27 みかの原 わきて流るる 泉川

28 山里は 冬ぞ寂しさ まさりける

29 心あてに 折らばや折らむ 初霜の

30 有明の つれなく見えし 別れより

31 朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに

32 山川に 風のかけたる しがらみは

33 ひさかたの 光のどけき 春の日に

34 誰をかも 知る人にせむ 高砂の

35 人はいさ 心も知らず ふるさとは

36 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを

37 白露に 風の吹きしく 秋の野は

38 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし

39 浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど

40 忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は

41 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり

42 契りきな かたみに袖を しぼりつつ

43 逢ひ見ての 後の心に くらぶれば

44 逢ふことの 絶えてしなくは なかなかに

45 あはれとも いふべき人は 思ほえて

46 由良のとを 渡る舟人 かぢを絶え

47 八重むぐら 茂れる宿の 寂しきに

48 風をいたみ 岩つつ波の おのれのみ

49 みかきもり 衛士のたく火の 夜は燃え

50 君がため 惜しからざりし 命さへ

今ひとたびの みゆき待たなむ

いつ見きとてか 恋しかるらむ

人目も草も かれぬと思へば

置きまどはせる 白菊の花

暁ばかり 憂きものはなし

吉野の里に 降れる白雪

流れもあへぬ 紅葉なりけり

静ず心なく 花の散るらむ

松も 昔の 友ならなくに

花ぞ昔の 香ににほひける

雲の いづこに 月宿るらむ

つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける

人の命の 惜しくもあるかな

あまりてなどか 人の恋しき

ものや思ふと 人の問ふまで

人知れずこそ 思ひそめしか

末の松山 波越さじとは

昔はものを 思はざりけり

人をも身をも 恨みざらまし

身のいたづらに なりぬべきかな

行く方も知らぬ 恋の道かな

人こそ見えね 秋は来にけり

くだけてものを 思ふころかな

屋は消えつつ ものをこそ思へ

長くもがなと 思ひけるかな

⑤1 かくとだに えやは伊吹の さしも草

⑤2 明けぬれば 暮るるものとは 知りながら

⑤3 嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は

⑤4 忘れじの 行く末までは かたければ

⑤5 滝の音は 絶えて久しく なりぬれど

⑤6 あらざらむ この世のほかの 思ひ出に

⑤7 めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に

⑤8 有馬山 猪名の笹原 風吹けば

⑤9 やすらはで 寝なましものを 小夜更けて

⑥0 大江山 いく野の道の 遠ければ

⑥1 いにしへの 奈良の都の 八重桜

⑥2 夜をこめて 鳥の空音は はかるとも

⑥3 今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを

⑥4 朝ほらけ 宇治の川霧 たえだえに

⑥5 恨みわび ほさぬ袖だに あるものを

⑥6 もるともに あはれと思へ 山桜

⑥7 春の夜の 夢ばかりなる 手枕に

⑥8 心にも あらで憂き世に ながらへば

⑥9 嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は

⑦0 寂しさに 宿を立ち出でて ながむれば

⑦1 夕されば 門田の稲葉 おとづれて

⑦2 音に聞く 高師の浜の あだ波は

⑦3 高砂の 尾の上の桜 咲きにけり

⑦4 憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ

⑦5 契りおきし させもが露を 命にて

さしも知らじな 燃ゆる思ひを

なほ恨めしき 朝ぼらけかな

いかに久しき ものとかは知る

今日を 限りの 命ともがな

名こそ流れて なほ聞きえけれ

今ひとたびの 逢ふこともがな

雲隠れにし 夜半の月かな

いでそよ人を 忘れやはする

かたぶくまでの 月を見しかな

まだふみも見ず 天の橋立

けふ九重に にほひぬるかな

よに逢坂の 関は許さじ

人づてならで 言ふよしもがな

あらはれわたる 瀬々の網代木

恋に 朽ちなむ 名こそ惜しけれ

花よりほかに 知る人もなし

かひなく立たむ 名こそ惜しけれ

恋しかるべき 夜半の月かな

竜田の川の 錦なりけり

いづこも同じ 秋の夕暮れ

蘆のまるやに 秋風ぞ吹く

かけじや袖の ぬれもこそすれ

外山の霞 立たずもあらなむ

激しかれとは 祈らぬものを

あはれ今年の 秋もいぬめり

76 わたの原 漕ぎ出でて見れば ひさかたの

雲居にまがふ 沖つ白波

77 瀬を早み 岩にせかるる 滝川の

われても末に 逢はむとぞ思ふ

78 淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に

幾夜寝覚めぬ 須磨の関守

79 秋風に たなびく雲の 絶え間より

もれ出づる月の 影のさやけさ

80 長からむ 心も知らず 黒髪の

乱れて今朝は ものをこそ思へ

81 ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば

ただ有明の 月ぞ残れる

82 思ひわび さても命は あるものを

憂きに堪へぬは 涙なりけり

83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る

山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

84 長らへば またこのごろや しのばれむ

憂しと見し世ぞ 今は恋しき

85 夜もすがら 物思ふころは 明けやらぬ

閨のひまさへ つれなかりけり

86 嘆けとて 月やは物を 思はする

かこち顔なる わが涙かな

87 村雨の 露もまだひぬ 槇の葉に

霧立ちのぼる 秋の夕暮れ

88 難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ

みをつくしてや 恋ひわたるべき

89 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば

忍ぶることの 弱りもぞする

90 見せばやな 雄島のあまの 袖だにも

濡れにぞ濡れし 色はかはらず

91 きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしるに

衣片敷き ひとりかも寝む

92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の

人こそ知らね 乾く間もなし

93 世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ

海人の小舟の 綱手かなしも

94 み吉野の 山の秋風 小夜ふけて

ふるさと寒く 衣打つなり

95 おほけなく 憂き世の民に おほふかな

わが立つ袖に 墨染めの袖

96 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで

ふりゆくものは わが身なりけり

97 来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに

焼くや藻塩の 身もこがれつつ

98 風そよぐ ならの小川の 夕暮れは

みそぎぞ夏の しるしなりける

99 人もをし 人も恨めし あぢきなく

世を思ふゆゑに もの思ふ身は

100 ももしきや 古き軒端の しのぶにも

なほあまりある 昔なりけり